

# 農山村における「地域活性化」の現状と課題

## —北海道羊蹄山麓地域を事例として—

小松原 尚\*

### I. はじめに

#### II 羊蹄山麓地域の農業

##### 1. バレイショ産地化の歩み

1) 留寿都村における「紅丸」

2) 京極町における「男爵」

2. 喜茂別町におけるアスパラガス生産

3. バイオテクノロジーによるユリ根生産

#### III. 「地域活性化」の現段階

1. ルツツ高原における総合リゾート化

2. 地域資源の掘起こしと活性化

1) 羊蹄山麓の湧水の活用

2) 人材育成と新たな里づくり

#### IV. 小括

### I. はじめに

第4次全国総合開発計画は金融の自由化、経済の国際化、産業構造の情報化の進展による東京一極集中現象に直面した1980年代後半に策定をみた計画である。4全総はこうした現状をふまえ、東京一極集中の利点を認めつつ流動・流通網、いわゆるネットワークの整備により地域間相互の交流を活性化し多極分散型国土形成を目指しており、従来の計画が東京集中を否定し、施設設備の分散を目標としていたのに比べ、大きな特徴となっている。

農業の衰退、若年層の村外流出と高齢化、国土の農業的土地利用度の低下による地域社会の崩壊現象といった過疎問題への対応に追われている農山村にあっても、食糧生産やクリエーションの場として、恵まれた自然環境を都市住民に印象づけることにより、地域間の交流を拡大し、地域活性化につなげる努力がみられる。本稿ではこれまでの市町村における実践例を主として役場発行の

要覧<sup>1)</sup>を基礎資料としながら整理することを課題としたい。要覧を資料としたのは入手が比較的容易であること、町村の現状を適確にまとめられたものであることによる。

羊蹄山麓地域は第1図に示した6か町村である。この地域を対象に選んだのは地域内に国立公園と国定公園を抱えていること、千歳空港や150万都市・札幌からも車で2時間と比較的近距離であることから、4全総にある「都市等との交流を通じた活性化」を検討するうえで恰好の素材であると判断したからである。また、これらの町村は俱知安・真狩を中心にその後、分村をへて現在に至っている歴史的経過も踏まえて一連の対象地域とした。尚、ニセコ山系にも含まれるニセコ町、俱知安町については紙幅も限られているため、他日別稿を用意したい。

4全総では一極集中は是正されず4全総によって拡大するという多くの批判的研究が発表されている。しかし一方では現実にこの4全総に依拠しそれぞの市町村が具体的な政策を展開しているのも事実である。そこでこうした批判に注意しつつ、様々な地域的な取組を整理することによって4全総の全体像解明への手掛かりとしたい。

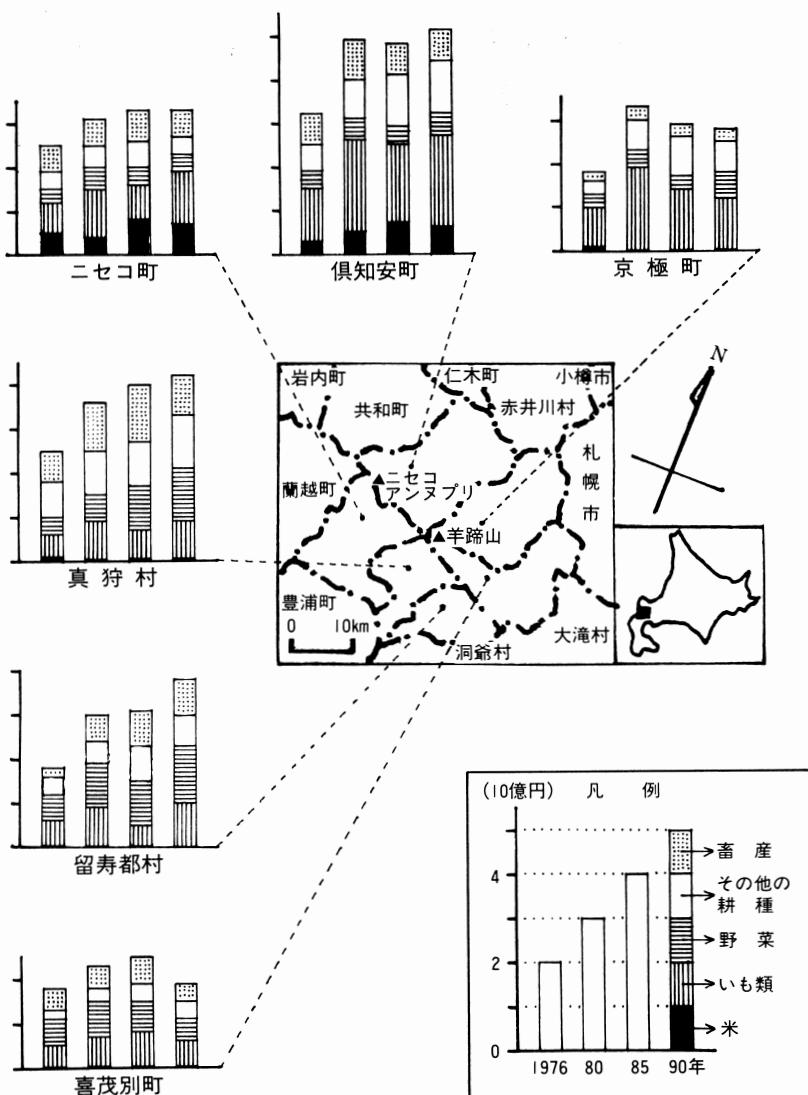
### II. 羊蹄山麓地域の農業

#### 1. バレイショ産地化の歩み

1) 留寿都村における「紅丸」

留寿都原野は火山灰性の土壌が広く分布しているので、開拓当初から畑地が展開していた。1894年に虻田・札幌間の道路改修、1904年に函館・小樽間の鉄道開通を契機として農産物の販路も一層広がったので、亜麻、バレイショなど加工用の原料となる作物の生産が拡大していった。加工用原

\* 北海高等学校



第1図 羊蹄山麓地域における町村別農業粗生産額の推移

(『北海道農林水産統計年報・農業統計市町別編』より作成)

料としてのバレイショ生産は殿粉製造技術の確立をみた今世紀初め頃から本格化し、10~20ha以上も殿粉原料用バレイショのみを連作する殿粉師と呼ばれる人々も輩出し、1910年代の中頃には道内の主要産地の一つとなっていました。

バレイショ連作の結果、地力減耗と病虫害が頻発し、過磷酸石灰や大豆粕などの金肥を大量に投入しても収穫量は減少し続けた。しかも1930年代前後の経済的混乱によって農業経営も大きな打撃を受け、金肥の購入代金にも不足をきたした。施

肥技術の改善とともに新品種への切替えも検討され、1933年ドイツ系の赤いバレイショの優良株の増殖に成功した。単位面積当たりの収穫量、殿粉含有量ともに他に抜きん出ていたので、36年には全村で栽培されるようになった。38年には優良品種の指定を受け、形と色にちなんで「紅丸」<sup>2)</sup>と命名され、現在もなお日本品種の代表の一つとされている。

## 2) 京極町における「男爵」

「男爵イモ」<sup>3)</sup>が京極町に初めて作付けされたのは1925年のことである。当時はまだ町内に扱う業者がいなかったので倅知安まで持つて行き販売したという。他のバレイショに比べて二倍以上の大さと、冷害にも強いことから、1928年に「男爵イモ」として農事試験場から優良限定品種の指定を受けた後、本格的に普及した。それまで京極の農産物といえば大豆をはじめ豆類が主であったが、豊凶差が激しく農家経営は不安定であったので、それに代わる作物として定着した。1930年当時、約1000戸あった農家の8割で栽培され作付面積も急激に拡大する。この地域は内陸性気候のため昼夜の温度差が大きく糖度の高いバレイショを収穫できる自然条件も備えていたので、生産量と農家収入も増大し、現在では主要作物作付面積の30%，第1図にも示したように農業粗生産額の40%を占め、「京極じゃが」として東京や関西の市場で人気を得ている。

## 2. 喜茂別町におけるアスパラガス生産

1924年に岩内では実業家がアスパラガスの栽培を始め、缶詰工場を発足させた。しかし、岩内地方だけでは原料に不足をきたすため喜茂別の農民と長期にわたる栽培契約を結び原料確保にあたり、29年に耕作が始まった。喜茂別は道内でも有数の豪雪地帯であり、2mにもおよぶ積雪がかえって保温の役割を果たし、冬季間の土壤の凍結を防ぎ、アスパラガスの越冬を助ける。また、軽くて柔らかい火山灰土壤が融雪後の地面の温度の上昇を早める。さらに昼夜の温度差が大きいので作物の糖度を高める。こういった自然条件と、1922年から27年まで村長の任にあった志賀勘治が村の窮状を開拓し現金収入の途を確立するためアスパラガス導入に積極的であったことから、農家による栽培発祥の地となった。

1984年には町内に新たに缶詰会社が産声をあげ、「搖籃の地」を意味する「クレードル」の商標で日本国内のみならず海外にまで、喜茂別産アスパラガス缶詰は知れるようになった。さらに、近年は生食用のグリーンアスパラガスも5月中旬から1ヶ月間「ふるさと小包」として全国発送されており、1.8kg入りのケースがこの期間中に3万ケースも発送され、この種の小包取り扱い量としては

全国一を誇っている。

## 3. バイオテクノロジーによるユリ根生産

真狩の土壤は洞爺カルデラの噴出物を主とし、風化が進んで有機質に富みかつ透水性もあるので畑作に適している。気候は羊蹄山の南麓にあるため風力は比較的弱いが、寒気は厳しい。暖候期の平均気温は14℃、寒候期の平均気温は-3℃であり、降水量は1,400mmである。積雪は多いが春先は温暖であるから融雪を早めるために散土作業を行っている。畑作物の中心は開拓当初からバレイショであったが、今ではユリ根が取ってかわっている。真狩でユリ根の生産組合が組織されたのは1966年、その後順調に生産量を拡大し87年には食用ユリ640t、花ユリ500万球で全国一(20%のシェア)のユリ根产地に成長した。この背景には82年から農協が茎頂点培養施設を導入し、バイオテクノロジーの成果を利用し、無菌状態の苗で高品質のユリの生産できることがある。農協のみならず、高校、農水省種苗管理センター、農業振興センターが一体となって生物工学の先端技術をことが第1図に示したような農業粗生産額の向上につながっている。

## III. 「地域活性化」の現段階

### 1. ルスツ高原における総合リゾート化

留寿都村における観光開発は1972年に札幌に本社のある観光資本による権負山(西山・標高715m)山腹のスキー場開設に始まる。83年には山麓に多くの遊具施設を備えた遊園地を開園し、一年を通じて楽しめるレジャーセンターとなった。さらに国道230号線を挟んで東側にある貫気別山(イゾラ山・標高994m)と「東山」(標高868m)の斜面を利用してスキー場が開設されている。この他にテニスコート、各種プールや乗馬コース、大規模な宿泊施設と会議場そしてゴルフ場を備えた、八ノ原から泉川地区にかけての総合リゾート地域になっている。ここを訪れる観光客は全国にわたっており、その知名度を農産物販売にも利用、留寿都村農協の主導により「ルスツ高原野菜」のブランドでダイコンを全国に向けて販売し、これまでの村の看板だったバレイショ、甜菜、アスパラガス、豆類といった作物に取って代わりつつある(第1

図)。

## 2. 地域資源の掘起こしと活性化

### 1) 羊蹄山麓の湧水の活用

羊蹄山は透水性が高いため、降水のほとんどが地下へ浸透する。しかも地下水脈は長く、湧出まで通常数十年を要するので、その間に地中から養分を吸収し熟成を重ねてほどよい硬度のまろやかな味の湧水となる。湧水は開拓当初から農業灌漑用水として、あるいは生活用水、産業用水として利用され、地域の人たちにとって「命の泉」であった。

京極町では四季を通じて絶え間なく湧き出る「ナチュラルウォーター」の一日当たりの水量は約8万トン、およそ30万人分の生活用水に匹敵し、簡易水道ポンプ場を設置し各家庭に供給されている。また、水質、水量、周辺環境、親水性に優れ、地域住民や行政による保全活動がしっかりとしていることが評価され、全国784件の候補の中から、1985年、環境庁より「名水百選」に指定された。これがきっかけとなって札幌を始め都市部からおいしい水を求めて観光客が殺到している。湧水口のそばには丸太を利用した樋を設置して、おいしい水を存分に楽しめるようにし、さらに86年以降、5億5千万円を投じて「ふきだし公園」<sup>4)</sup>の整備を行ってきた。また1990年からは、この公園を中心として8月中旬に「名水の里しゃっこいまつり」を開催している。この結果、86年には10万人に足らずだった観光客入込数が90年には50万人近くまで伸びている。

一方、羊蹄山の南麓の裾野広がる通称真狩原野と呼ばれる標高200～300メートルの台地上にある真狩村は中央を真狩川が西流し、支流が枝状に流れている。羊蹄山の雪解け水が地中にしみこみ伏流水となって岩石の地層を透過し、標高250メートル付近の真狩川沿いに湧き出ている。一日当たり45,000トンの湧出量の水は村内にある殿粉工場の殿粉製造用として利用されているし、ニンジンやダイコンを漬け込んで「なた割漬」を作るときにも使われる。そして、完全無菌のまま容器に入れられ、超一級のミネラルウォーターとして飲料用や化粧水、製氷用に利用されている。さらに、清流に育つドナルドソン（ニジマスの1種）の養殖

池もこの水で満たされ、成魚は村内青年有志によって結成された村おこしグループ<sup>5)</sup>によって加工・出荷されている。

### 2) 人材育成と新たな里づくり

真狩村では1981年、「生涯学習の村」を宣言し各地区ごとに「生涯教育振興会」を組織し、児童から高齢者まで全村民がいずれかの会に属して活動し、総合文化祭などの催しを実施している。さらに、村では学校教育も生涯教育の一環としてとらえ、社会教育と学校教育、特に高校とが相互依存の関係にありユニークな実践を行っている。また、94年に開基100年を控え、芸術家が都会から移住し、廃校をアトリエとして利用し、創作活動する「芸の里」構想も進められている。

## IV. 小括

羊蹄山麓地域における農業の展開過程はバレイショの産地として確立のあゆみでもあった。しかし、近年アメリカをはじめ諸外国からの殿粉をはじめとする農産物自由化要求の高まりの中で脱バレイショに向けての模索も行われている。その試みとしてアスパラ生産と販路の拡大、生物工学の成果を応用したユリ根生産のシェアの増大は注目される。

日本経済の高度成長期に過疎化の進行をみた当地域にとって、1970年代以降本格化する留寿都村におけるスキービー観光の活発化は過疎化の歯止めに一定の効果をもたらしたと考えられる。即ち、1960年代から80年まで一貫して減少していた村の人口が80年代後半からは安定化に向かい、近年は微増傾向にすらある。こうした中で、観光地としての知名度を活用し農産物や特産物の販路を広げ、地域の新たな資源を掘り起こしを行い、様々なイベントによって新たな交流機会を創出している事が地域活性化にどのように結び付くか引き続き注意して見てみたい。

いわゆるバブル経済の崩壊によって、これまでのリゾート開発に依存した地域活性化策も再検討を迫られている。また、今後様々な地域で類似のイベント企画や商品化が見られると考えられ、それらを克服しリピーターを確保するためにも地域における人材育成が重要になろう。

本稿作成にあたり、藤女子中学・高等学校教諭高平順夫氏、JTB教育旅行札幌支店鰐谷広志氏、近畿日本ツーリスト札幌ユーストラベル支店山梨敏行氏、北海道後志支庁経済部商工労働課および総務部会計課から資料の提供をうけた。記して感謝の意を表するものである。

### 注

- 1) 参照した要覧やパンフレット類を以下に記した。  
「NISEKO EXPRESS Vol.6」ニセコ山系観光連絡協議会。「えぞ富士・羊蹄山」羊蹄山避難小屋連絡協議会。「真狩1991村勢要覧」。「四季の里・留寿都村」留寿都村・留寿都村観光協会。「きもべつ」喜茂別町役場・喜茂別町観光協会。「きょうごく」京極町・京極町観光協会(役場企画室)。「名水の里ふきだし公園・名水プラザ」ふきだし物産株式会社。上記のはかに「北海道新聞」の記事、「第21回俱知安大会巡査羊蹄山麓周辺資料」北海道地理教育研究会も参考にした。
- 2) 1972年、紅丸薯発祥之地顕彰記念碑建立期成会によって碑の建立をみた。碑文には、「紅丸」の種イモを北海道農事試験場長安孫子孝次がドイトで入手したこと、種芸部馬鈴薯育種主任宮沢春水が1929年に品種交配して「本育309号」を生み出した後、試験場の吉野至徳、山崎俊次、農林省技師田口啓作らが育種に協力、優良品種に指定された経過が詳細に記されている。さらに太平洋戦争当時の食糧難に際し、10アール当たり6トン以上も増収でき、国民の飢えを救った業績などもつづられている。
- 3) 原名をアイリッシュ・コブラーといい、ナス科バレイショ属の1種である。道内には1907年に川田竜吉男爵がイギリスのサットン商会から輸入し、自分の農場に植えさせたのが始まりとされている。
- 4) 京極町川西にある羊蹄山東麓に湧出する泉を中心とした面積約5haの公園。後志十景の1つで、羊蹄山登山京極コースの入り口近くにある。幅1.5m、長さ50mほどの吊橋を渡ると、ハルニレ、ハンノキ、シラカバなどの広葉樹が四季を彩る。7~8月にはしたたるような緑の樹林の中で涼味を与えてくれるし、色付いた樹々の水面に映し出される紅葉の頃の美しさも格別である。公園内にはレストランとみやげものの店の入ったログハウス風の名水プラザ、多目的広場、フィールドアスレチック、野外ステージなどが整備されている。湧水を含めてこの公園は1990年度の「建設省・手づくり郷土賞」を受賞している。
- 5) 「マッカリ俱楽部」と称する村内の青年有志によって結成された村おこしグループ。1986年の結成以来、ニジマスの改良種ドナルドソンのソフト燻製の製造と流通に実績を上げた。メンバーは食料品店を経営する代表者の他、

建設業、洋品店、配管業など様々な職業をもつ8名によって始められた。結成の動機は81年に村が「生涯学習の村」を宣言したことを見て、村に活気を取り戻そうとの意識が青年たちの中に高まることによる。ドナルドソンは体長50~60cmで肉は厚く脂肪のり、味も良い。類似のスマートサーモンの価格の3分の1で売り出し、87年度は1パック300gで2,000パックすべて売り尽くした実績がある。

### 文 献

- 浅香幸雄・山村順次(1974) :『観光地理学』大明堂, 234p.
- 池 俊介(1986) :長野県蓼科の観光地化による入会林野利用の変容。地理学評論, 59A, 131-135.
- 呉羽正昭(1991) :群馬県片品村におけるスキービー観光地域の形成。地理学評論, 64A, 818-838.
- 経済地理学会編(1992) :『経済地理学の成果と課題・第IV集-構造変化する時代の地域視座-』大明堂, 364p.
- 国土庁計画・調整局(1989) :『第四次全国総合開発計画・解説と資料・第I部・資料編』ぎょうせい, 682p.
- 国土庁計画・調整局(1989) :『第四次全国総合開発計画・解説と資料・第II部・解説編』ぎょうせい, 860p.
- 国土庁計画・調整局四全総研究会(1987) :『第四次全国総合開発計画-40の解説-』時事通信社, 356p.
- 小松原尚(1991) :リゾートブーム下の「地域活性化」-沖縄修学旅行を事例として-。地理, 36-11, 119-125.
- 小松原尚(1992) :農業地域と過疎問題。北海道地理, 66号, 19-24.
- 白坂 蕃(1982) :中央高地梅木高原における新しいスキービー集落の形成。地理学評論, 55, 566-586.
- 蓼沼朗寿(1991) :『地域政策論〔第2次改訂版〕』学陽書房, 298p.
- 平本一雄(1990) :『超国土の発想』講談社, 367p.
- 柳沢 勝(1991) :『国土政策のパースペクティブ・地球時代の日本-もうひとつの富国論』住宅新報社, 349p.
- 留寿都村史編集委員会(1969) :『留寿都村史』北海道虻田郡留寿都村役場, 458p.